

外部相互作用と創造的プロセスに関する事例研究

立命館大学 OIC 総合研究機構 鈴木羽留香

本発表では、外界との相互作用による洞察の変化と可塑性に関する身近な事例を取りあげ、不変な個人の固有性のパターンを明らかにするための要素を提供する。創造性に資する洞察プロセスにおける「制約は固定したものでなく、外界との相互作用を通してダイナミックに変化すると仮定」¹されており、こういった変化する制約と、生得的な要素との両面から、創造性の個人差を考察する必要がある。

特に「洞察問題の解決においては意識できないレベルの情報を取り込んだ処理が行なわれていることを示している」³ ため「問題となるのは、どのような制約が洞察に関与するかである」²といった側面を分析するための枠組みの設定はおろか、その事例自体も内部観測のみでは困難である。たとえば「洞察問題解決が潜在的情報処理による学習であることを示すためには、どのような方法があるのだろうか。たとえば、一定時間、あるいは試行ごとに問題解決を中断させ、その間に何を学習したかを直接聞くという方法があるかもしれない (Metcalfe,1986)」³ という提案もなされており、その潜在的プロセスに関する事例の蓄積の重要性がわかる。特筆すべきは「ゲシュタルト心理学においては、様々な課題を用いた洞察研究が行われ、洞察過程を再構造化のプロセスととらえる重要な仮説が提出された (Wertheimer, 1945 矢田部訳, 1952)」² ように、再構造化されるに至るまでの一連のプロセスをトータルで示せる事例の必要性であり、本発表では、地域に密着した事例からその事例蓄積の在り方と、実際の相互作用と創造性プロセスに関する考察を実施する。

¹一夫,鈴木宏明「表彰変化の動的緩和理論:洞察メカニズムの解明に向けて」

「特集-表彰変化のメカニズム」『認知科学』 Vol.5, No.2 日本認知科学会,1998

²鈴木宏昭,宮崎美智子,開一夫「制約論から見た洞察問題解決の個人差」『心理学研究』第74巻,第4号,2003

³鈴木宏明,福田玄明「洞察問題解決の無意識的性質:連続フラッシュ抑制による閾下プライミングを用いた検討」「特集-高次認知過程における意識的,無意識的処理」『認知科学』 Vol.20, No.3, 2013